
カウントダウン

マコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カウントダウン

【Nコード】

N4386Y

【作者名】

マコト

【あらすじ】

巨大隕石が猛スピードで地球に接近し、もはや衝突が避けられなくなつた。人類に残された時間は、僅か25時間。僕は長年住み慣れた街を離れ、愛車で子供の頃に住んでいた海沿いの家を目指す。廃墟と化したその家のクローゼットにいるのは、子供のころに僕が本気で愛した人……。僕は人生の最後をその人と過ごすべく、巨大隕石が迫る来る中、車を走らせる……。

「直径130キロの超巨大隕石・M?Z1287は、50兆キロ彼方、さそり座のアンタレスの方角から、まっすぐ太陽系に向かって進んでいます。その速度は秒速約500万キロ。このまま進路を変えずに進めば、間違いなく太陽系に突入してくるでしょう。NASAの算定によれば、この隕石が地球に衝突する確率は約95パーセント。あと25時間と43分後には地球の大気圏内に隕石が到達するということですよ・・・」

国営ラジオのアナウンサーは、所々で声を裏返ししながら、早口にそう告げた。僕は右手でムーブのハンドルをしっかりと握りながら、左手でラジオチューナーの自動サーチボタンを押した。つかの間のタイムラグがあり、次の瞬間聞こえてきたのは、マイケル・ジャクソンの「ビート・イット」だった。

エイト・ビートのバックコーラスと、内臓に心地よく響くベースギターの重低音。その上で弾けるマイケルのセクシーなボーカル。僕は、自動車専用道路を歩く人の群れを轢いてしまわないように、ハンドルを小刻みにきりながらも、思わずカーステレオを見やっただ。

「ハッイ。全地球のマイケルファンの皆様、お元気ですかあ！楽しんで生きてますかあ？そして、あと、わずか1日しかないあなたの命、大切にしますかあ？この地球という惑星にいる限り、我々地球人類は、超巨大隕石の衝突によって、一人残らず死にます。それも、みんな同時に死ぬのです。地位も名誉も貧富の差も、性別も国籍も人種も年齢も、一切関係なく、みんな仲良く死ぬのです。抜け駆けなんかできません。セレブの一部には、ロケットを買い取り、地球脱出を試みる人もいるようですが、所詮無駄なことです。地球と同じ環境を備えた惑星に到達するには、少なくとも数百年から数

千年かかるのですから。まったくもって無駄なことです。マイケルファンの皆さん、死ぬことが怖いですかあ？死ぬのは嫌ですかあ？でも、仕方ありません。あきらめましょう。何も死ぬことを悲観することなんかありません。私達は、みんなマイケルと同じ所へ行けるのです。なんと、幸せなことでしょう。私達は、再びマイケルに逢えるのです。私は、当海賊放送DJの使命として、超巨大隕石が地球にぶつかる、その瞬間まで、地球が生んだグレイトアーティスト、マイケル・ジャクソンの名曲の数々を、余すところなく流し続けます。皆様、地球最後の瞬間まで、心おきなくマイケルの音楽を楽しんで下さい……」

若い男性DJの声には、いささかの悲壮感も感じられなかった。元気で、陽気で、清々しくさえあった。僕は、そのDJのメッセーじとマイケルのボーカルに背中を押されて、じんわりとアクセルを踏み込んだ。

自動車専用道路を歩く人の群れは、途切れることなく同じ方向に向かって続いている。大半は両手に大きなバッグを持ったり、デイパックやリュックを背負っている。髪を金色に染めた母親が、3歳くらいの男の子の手をつかんで両目を釣り上げ、男の子を引きずるように小走りに人を押し分け、先へ進んでいく。男の子は何度も前のめりに倒れそうになり泣き叫びながらも、母親についていくのに必死だ。

その後方には、同じ会社の同僚達だろうか？スーツ姿の一団が、胸を張って堂々と歩いている。何の会社か分からないけど、よほど固い結束で結ばれた連中か、そうでなければ何らかの特殊な洗脳を受けた集団かもしれない。

恋人同士や夫婦は、一様に肩を抱き合い、手をしっかりと握り合っ
て行進していく。少なくともこの状況の中で、あんなふうには仲のよ
さをアピールできるといえるのは、彼らの仲がそれなりに良いという
証しだろう。肩を抱き合うカップルの中には、不倫関係の男女もい
るだろうし、また、この1週間にインターネット上で知り合ったば

かりの「終末の恋人」もいることだろう。いや、むしろそういう関係のカップルの方が圧倒的多数かもしれない。

1週間前、NASAが地球軌道上に打ち上げたばかりの最新鋭の全方向型電波望遠鏡で超巨大隕石・M?Z1287を発見し、「地球全体に関わる緊急事態」として世界中の政府に対し声明を発表してから、ネット上では「終末の恋人」探しと銘打ったサイトが無数に現れた。

『地球最後の瞬間をあなたの一番大切な人と過ごしましょう！お急ぎください。隕石の接近に伴い、今後通信システムにも異常が発生する可能性があります。どうか今のうちに、あなたの生涯最後となる大切なパートナーをお探し下さい』

これがその種のサイトの謳い文句だった。当然、会員制の有料サイト。

最後の最後まで、人間の欲望には際限がない。僕は興味本位にサイトを閲覧しながら、何度となくため息をついたものだ。

僕には恋人と呼べる相手はいない。そればかりか、気軽に食事のできる女性の友達さえいない。もちろん、1週間前まで働いていたレトルト食品工場には、女子社員も多数在席していた。独身のシングルからバツイチ、シングルマザーと生態も性格も多種多様だった。

中には、同じラインで働く僕に「付き合ってる人とかいるんですか？」と、アプローチしてくる女子も何人かいた。それも、世間一般の標準からしても充分「カワイイ」というカテゴリーに入る種類の子達が、以外に多かった。「自分には男として何の魅力も、アピールできるポイントもない・・・」と、常日頃自覚していた僕にとって、上目づかいに僕を見つめる彼女達は新鮮であり、男として嬉しかった。

でも、僕はその誘いのすべてを断り続けた。女性に対して全く興味が無いというわけでもなければ、ゲイというわけでもない。僕が女性からの交際申し込みを断る理由はただ一つ・・・昔、好きになり、愛した女性のことがどうしても忘れられないからだ。

街を離れるにつれて、人の群れは次第に少なくなっていく。すべての人が街を離れるわけではない。住み慣れた街で思い出とともに終焉を迎えたいと願っている人もまた多いのだ。たとえば何処へ逃れようと、「死」という現実には確実に個々人の上にやってくる。公の情報で安全と言われるシエルターや、「最後の時を理想郷で共に過ごしましょう」というカルト集団や「極上のリゾートから天国へ」というもっともらしいコピーで営利主義に徹する企業の戦略にやすやすと乗ってしまうよりは、どんなに危険でも自分が生まれ育ってきた街や村で最後の時を迎えたいというのが、普通の人間にとっては一番自然なことなのだろうと僕も思う。

僕は住んでいた街に対して特別の感慨とか未練というものはない。生まれてから35年間暮らし、その時々々の思い出とともに生きてきた街。数え切れない喜びや悲しみや挫折や希望を感じながら生活してきた空間だ。それなりの愛着はある。でも、僕は特にそこで最期を迎えたいとも思わない。それだけのことだ。

ムーブは、街からの脱出を試みる歩行者の群れを、かわしながら、徐々に僕の住み慣れた街を離れていく。もう、僕の命がある間に、この街に戻るといふことはないのだ。僕はルームミラーの中で、次第に小さ遠くなっていく町並みを見つめながら、小声で「サヨナラ」と呟いた。街の外れに來ると、自動車専用道路は終点を迎え、細い田舎道に繋がっていた。

充分な舗装もされていない、その細い田舎道を、ムーブは土煙を上げつつ走っていく。と、その時、車道の真ん中を歩いていく人間の背中が一つ現れた。その背中が、特に急ぐ様子もなく、細い道をゆったりと歩いていた。周りには誰もいない。車の速度を緩めて近づき、様子を窺う。

それは、少し腰の曲がった年配の男性だった。男性は、背後から車が近づくの気付いていないのか、振り向くことなく、道の真ん中を歩き続けている。僕はクラクションを鳴らそうかとも思ったが、

人生の最後に、人に対して不愉快な感情を持つたり持たれたりするのも嫌なので、しばらく徐行を続けた。

広い道なら、前を歩く男性を迂回することもできるが、車一台通るのがやっとなという細道で、それは不可能だった。しかも、その両側には黄金色に実った麦畑が一面に広がっている。

「この麦は誰からも刈り取られることなく、24時間後には灰になっってしまうんだ・・・。」

ぼんやりそう思いながら、歩くような速度でムーブを前進させていた時だ。前を歩いていた年配の男性が、急に立ち止まって振り返った。僕はギョツとして慌ててブレーキを踏んだ。

振り返った男性の口周りと顎には「立派」という形容がうっつけの銀灰色の髭が蓄えられていた。杖こそついてないが、後ろから見ると腰は大きく前傾していて、老いが顔全体を覆っている。

老人はしばらくフロントガラス越しに僕を見つめていた。髭と同じ銀灰色の髪と額に深く刻まれた数本の横皺、それに毛髪とは裏腹に黒くて太い眉と程よく垂れ下がった目じり。

僕は、初対面のその老人の風貌に不思議な懐かしさを感じていた。

どれくらいの間、僕と老人とは見つめ合っていただろう。やがて老人は、何かを思い出したように、垂れ下がった目をひときわ大きく見開くと、運転席の方へ歩み寄って来た。僕はパワーウィンドを降ろして、老人を出迎えた。

「お急ぎのところをすまんが、ワシを乗せてってくれんかね？」

老人は少しばかりしゃがれた声でそう言うと、人懐っこい目で僕を見つめた。

「どこへ行きたいんですか？」

「ああ、ワシの孫の所へ行ってもらいたいんじゃないよ」

「お孫さん・・・ですか？」

「そう。ワシのとびきり可愛い孫娘の所へじゃ」

「お孫さんはどこにいるんですか？」

「ほれ、見えるか。あの森を越えた向こう側。孫娘はそこにおるん

じゃ」

老人は、細い道の先にある森を指さした。僕は、「いいですよ」と返事して、助手席のドアを開けた。

「お急ぎのところをすまんですな。助かります」

助手席に座った老人は頭を下げて、相好を崩した。

「お孫さんは、何歳ですか？」

僕はゆっくりとムーブのアクセルを踏み込みながら尋ねた。

「4歳です。もうかわいい盛りでのお。ワシは初め、孫を持つなら男がええ、と思うとったですよ。男の子なら一緒に釣りをしたり工作をして遊べますからのお。ところが、生まれてきたのは女の子……。正直、がっかりしりました」

当時を思い出したのか、老人はさも残念そうに肩を落とした。

「じゃが、すやすや眠ってる姿を見ると、どうしようもなく可愛くてのお。カエデみたいにちっちゃくて、触ったら壊れてしまいそうな手足に綿で出来たような柔らかい体……。目に入れても痛くないというのはこのことかと、この年になって気付かされたですよ。それに、小さな女の子には男の子にはない可愛らしさがありましたのお。ワシの顔を見てニコツと笑った時は、何かこつ恥ずかしいよ。うな、体の中の方をこちょこちょと、くすぐられとるような気持ちがしてたまらんですよ」

顔じゅうを皺だらけにしてニヤける老人につられて、僕も口角を下げた。

「わしは、孫娘さえおれば、他はなあんもいらんですわ。食べるもんも着るもんも、いや、あの娘さえおりゃあ、家さえもなくていいと思うとります」

ムーブは森の木々の間を快調に進んでいく。左右に広がる広葉樹から差し入る木漏れ日が、心を安らげてくれる。

森の先を見つめる老人は心底、幸せそうだった。不安も恐怖も焦りの色も、彼の表情には微塵もなかった。僕は、ふと「この老人は、あと1日で地球が崩壊してしまうと知っているのだろうか」

と思った。僕は、今起こりつつある地球的危機について、助手席の老人に話しかけようかと思ったが・・・止めた。もしも、知らなければ知らないままの方がいいのだ。知って恐怖におののき慌てふためくよりも、今現実を感じている幸せに包まれたまま終焉を迎える方がいいに決まっている。

僕は無言のまままでハンドルを操作し、やがて森から抜け出した。森を向けた所には、小高い丘があり、その斜面に張り付くようにして小さな墓地があった。墓石の数は指を折って数えられるほどだ。

「ありがとうございます。ワシは、ここで降りますで」

老人はそう言った。僕はゆっくり減速しながら「えっ？」と、老人の顔を見つめた。老人は、僕の方を見て、お辞儀をしながらにこやかに笑っている。僕は車を止めて、あたりを見渡した。人の気配はおろか、人家さえも見当たらない。

「でも、ここには墓しかありませんよ。いったい、お孫さんはどこにおられるんですか？」

老人は、助手席から外に降り立つと、真っ直ぐ墓地に向かって歩いて行く。僕も車を降りて、老人の後に続く。

「ワシの孫娘は、ここにおりますんじや」

老人は、なだらかな丘の斜面の一番下に立つ、小さな墓石を指さした。

「2年前の夏から、ずっと4歳のままでこの下に眠っております。隣にあるこの墓にはワシの娘がおります。二人とも交通事故で天国へ逝きよりました」

僕はどんな言葉をかけるべきか、頭を巡らせた。でも、頭はおろか、僕の体中のどこにも言葉を見つけたことは出来なかった。

老人は墓を愛おしそうに見つめながら、穏やかに微笑んでいる。その表情にはいささかの陰りもなかった。

「ワシはこの一週間、この日が来るのを楽しみに待ってたですよ。あと少しで、娘や孫娘のおるところに行けると思ったら、もう嬉しくて嬉しくて・・・。昨夜は眠れやしませんでした」

老人は、本当に楽しそうに声を張り上げて笑った。僕は、屈託のないその声に救われた気がして、

「あなたのお役に立てて光荣です！」

と、深々と頭を下げた。すると、老人は、

「はあ、どうも本当にありがとうございます。あなた様も、気を付けて。旅のご無事を孫娘達と祈つとりますでな」

と、右手を高々と差し上げた。僕は再び老人に一礼をし、ムーブに乗り込んだ。それから、サイドミラーの中で手を振り続ける老人を見つめながら、ゆっくりとその場を離れて行った。

僕は一人のドライブを再開した。心も体も温かく安らかな気持ちで満たされていた。僕は自分の人生最後になつただらう、老人との出会いに感謝した。本当に幸せな終焉とは、ああいうの言うんだらうな、と思いながら。

ムーブは細い田舎道を軽快に走っていく。さつきまで止めていたラジオのスイッチをオンにした。街から随分離れたせいか、かなりノイズが混じっていて聞き取りにくい。手動でチューニングつまみを微調整させると、壮大なコーラスが聞こえてきた。「ウィ・アー・ザ・ワールド」だ。マイケルのソロに続いて、ライオネル・リッツ、シンディ・ローパー、ステイビー・ワンダーなど、アメリカンポップ界の錚々たるメンバーが謳いあげる命のコーラス。「地球最後の日」に最もふさわしい曲だと僕は思った。

「全地球上のマイケルファンの皆様方。この素晴らしい大合唱をお聞きください。我々の人生は、命は、あと残り数時間で終りを迎えます。喜びも、悲しみも、憎しみも、怒りも、快楽も、苦痛も、希望も、後悔も、不安も、恐怖も、焦りも、財産も、名誉も、地位も、家族も、恋人も、友人も、宿敵も・・・みんな、なくなるのです。みんな、いなくなるのです。でも、我々は、みんなマイケルの元へ逝けるのです。新しい、未知なる世界へ旅立terるのです。みんなが同時に、この地球という三次元の世界から、より高次元の世界へ逝けるのです。肉体を持っているうちは逝けなかつた所へ、我々は向

かつのです。私には、聞こえます、マイケルの呼ぶ声が。私には見えませんが、マイケルが手を振って招いている姿が。さあ、あとほんの数時間の辛抱です。明日の今頃には、この母なる地球、大いなる地球、宇宙のオアシスである地球は、跡形もなく砕け散って塵となっていることでしょう。旅立ちの準備はオーケーですか？私は、このマイケルの遺してくれた素晴らしい曲達と共に、永遠の旅に出掛けるつもりです」

DJの言葉に、思わず胸が熱くなった。

そうなのだ。考え方を変えれば、これは人類始まって以来の、全人類がこぞって参加する、全地球的な一大イベントなのだ。地球最後の日によく人類に平等が実現するのだ。

僕はたまらなく楽しくなって、アクセルを踏み込んだ。細い田舎道は、やがてムーブを海へと導いた。僕はパワーウィンドを全開にした。風に乗って潮の香りが僕の体を包んでいく。まるで「おかえり」と言っているように。

太陽が水平線の彼方に沈もうとしていた。太陽は鮮やかなオレンジに染まり、海面は碧く、そして薄蒼い空が目の前に広がっている。地球で見る生涯最後の夕陽だ。

と・・・薄暮の空、太陽の右側に、ひときわ白く大きく輝く星が一つ見えた。

あれだ！あれが、あれこそが超巨大隕石・M？Z1287なんだ。天から地球への、全人類への大きな贈り物なんだ！僕は車を止め、その地球最初にして最後の、宇宙からの訪問者を見つめた。

「ようこそ、地球へ。宇宙空間の孤独な長旅、お疲れ様。あと、ほんの数時間で君の旅は終わる。ここが、ゴールだよ。ここへ向かって、真っ直ぐに飛び込んでくるがいい」

僕は、恒星となった超巨大隕石・M？Z1287に向かって、静かに語りかけた。

太陽が海に没すると、訪問者は一段と輝きを増し、月よりも明るく世界を照らし出した。

まるで白夜だ。北欧はおろか、この日本から出たことのない僕は、生涯の最後に自分の生まれた国で白夜を体験できることに感謝した。

僕は再びムーブを発進させた。目的地までは、あと僅かだ。僕は潮風を呼吸しながら、海岸線の道を岬の方へ進んだ。内陸に向かって緩やかに湾曲した道を走りきったところに、僕のゴールはあった。岬の突端に張り付くように建っている木造2階建ての小さな家。

僕は、ムーブをその間近まで寄せて停車させ、エンジンを切った。車を降りる時、僕は愛車に向かって「ありがとう」と呟いた。もう、この車を運転することはないのだ。無機質の車とはいえ、僕をここまで運んでくれた相棒だ。親友のような情愛が湧いたのだ。

木造の家は、岬の先端にひっそりと佇んでいた。それは、もう何年もの間、誰も住む人のない廃墟だ。白い壁板は所々朽ちて剥がれ落ち、風雨に晒された窓ガラスの殆んどは割れている。

それは僕が子供の頃に両親と住んでいた家だ。

僕は、形だけ鍵のかかった玄関扉のガラスの破れ目から、扉の内側へそっと手を差し入れ、鍵を解除した。メッキが？がれ落ち、錆びついた扉の取っ手を力を込めてゆっくりと引く。

激しく軋みながらも、どうにか扉は開いた。カビの匂いと埃とが僕を出迎えてくれる。

僕は靴のまま板張りの廊下を歩いて、各部屋の窓を開け放っていた。潮風とともに心安らぐ海の香りが、家全体を満たしていく。もう夜の帳が下りているはずだが、恒星のおかげで、各部屋には柔らかな光が射し込んでいる。僕は足元に気をつけながら、玄関脇にある階段をゆっくりと登って行った。階段は、何年ぶりかの来訪者に驚いたかのように、ミシミシと大きな音を響かせた。階段を登りきった僕は、小さな踊り場の右手にある部屋の取っ手を引いた。その先には、僕が子供の頃に使っていた6畳の部屋がある。

部屋へ入ると、僕はまず埃と潮のこびりついた窓を開け放った。海に面した窓から、心地よい潮風が吹き込んでくる。猛接近する恒星の光が、部屋の中を明るく照らし出す。もう、20年以上も住人

のいなかった部屋。僕にとってのそこは、聖域だった。

僕の両親は、僕が9歳の時、海難事故で死んだ。ヨットの好きだった二人は、僕を叔父の元へ預けて、ヨットレースに参加した。かなりのベテランだったはずなのだが、レース中、予測不可能な突風に煽られ、ヨットが転覆。すぐに救助隊が現場に急行したが、二人は見つからず、その3日後に遺体となって海上を漂っているところを、捜索中の船舶に発見された。二人は、ロープで腰をしっかりと結びあっていたそうだ。

両親亡きあと、僕は叔父の元に引き取られ、この家を去ることになった。叔父は、主のいなくなった廃墟を何度も解体しようと思っただらしい。しかし、自分の妹達が暮らしていた住処を人に売ったり、解体することによってどうしようもなく抵抗があり、処分を保留し続けたのだった。以来、この家は長きに渡り、人の手に渡ることも解体されることもなく、この岬の先端に建ち続けている。

家具や調度類のすべてが撤去された部屋は、殺風景で吹き込む風と波の音以外、何の気配もなく静寂で虚ろだった。壁や床には黒い染みが浮き出っていて、時の流れを実感させた。

部屋の真ん中に立っている僕の中に、子供の頃の懐かしさが温もりとなって甦って来る。

おそらく僕の人生の中で一番幸せだった頃。穏やかで、安らかで、最も心が満たされていた時代。そして、子供の頃、僕はこの部屋で彼女のことを好きになり、この小さな空間で彼女共に過ごしたのだ。彼女と過ごした、ほの甘くて切ない密月。

僕は、部屋の壁に埋め込むように造られたクローゼットを見つけた。

壁の半分近くを占める大きさの両開きのクローゼット。彼女は、今でもその中にいる……。

僕は高鳴る胸を押さえて、ゆっくりとクローゼットに近づいて行っただ。本来白かった扉のコーティングは、殆どどの部分が？がれるか

めくれ上がっていて、表面がささくれ立っている。かつて取っ手のあった部分には拳ほどの穴が開いている。僕は、手を傷つけないよう、慎重にその穴から手を差し入れ、力を込めて扉を手前に引いた。軽く軋みながらクローゼットは開いた。

しばらく暗い闇が僕の前に拡がったが、時間とともに光度を増していく巨大隕石の明かりで、クローゼットの奥まで明るく照らし出された。そして、綿埃の積もったクローゼットの中にそれはあった。それは、各辺が30センチほどのアルミの箱だった。

僕は、半身をクローゼットに押し込むようにして、それを取り出した。箱の上にも銀色の表面が見えないほどに綿埃が積もっている。掌でその20年間に蓄積された塵の山を払いのけると、箱の蓋と本体とを密封した布テープが現れた。不思議とガムテープの方はそれほど、変色も劣化もしていなかった。僕は、箱を一周する茶色い布テープを、慎重に剥がした。後は、蓋を開けるだけだ。胸が高鳴る。僕は気持ちを落ち着けるために、一度、大きく深呼吸をした。

次第に大きくなりながら発光の度合いを強めていく超巨大隕石の光が、アルミの蓋の上に反射している。箱の中には、僕の一番大切な宝物がある。そして、僕にとっては一番愛おしい彼女が、この中にはいるのだ。

僕は意を決して、蓋を開けた。
。彼女はその横たわっていた。プラスチックケースに入った彼女は、25年前と同じ姿、同じ笑顔で、僕を迎えてくれた。

「ただいま、スマレちゃん。帰って来たよ」
僕は、人形に微笑みかけた。それは世間的には「りかちゃん」と呼ばれる人形だった。彼女こそ、僕にとっての初恋の相手であり永遠の恋人だ。

7歳の誕生日、両親に連れられ、おもちゃ屋へ行った僕は、ショーケースの中にいた彼女に一目惚れしてしまった。父も母も困ったような顔をして、しきりに怪獣のモデルとか、当時流行っていたヒーローグッズを買ってやろうと僕に薦めたが、ショーケースにへばり

ついた僕は、頑としてそこを動かなかった。そして、親との根競べに勝利した僕は、「りかちゃん」人形を手に入れ、家に連れ帰ることができたのだった。

「スマレちゃん」。実を言うと、この名前を付けたのは僕ではない。シヨーケーヌ越しに初めて彼女と対面した時、彼女が僕に話しかけて来たのだ。

「こんにちは。はじめまして、スマレです」

と。彼女は僕に向かって、はっきりとそう言ったのだ。人形がしゃべるなんて・・・大人はそう思うだろう。大人じゃなくても、普通の人間なら誰でも「人形が口を利くなんて、精神的にイカしてる」と思うだろう。でも、僕には間違いなく、彼女の明るく澄んだ声が聞こえたのだ。

僕は嬉しかった。本当に嬉しかった。今までの人生の中であんなに幸せで心がときめいた経験はなかった。もしかして、僕は変な奴だったのだろうか。それとも。特別な感覚を持って生まれた人間だったのだろうか？

当時の僕には、友達も何人かいて、その中には女の子もいた。決して性格が暗くて、いじめられ、心が歪になっていたわけでもなかったし、孤独を愛するクールな少年というわけでもなかった。客観的に見ても、日本全国どこにでもいるような、何の変哲もとりえもない、ごく一般的な子供だった。

でも、僕はその僕の掌に乗るくらいに小さな人形のことを、心から大切に感じたし、この上なく愛おしく思っていた。そして、その時の気持ちは今でも変わることなく続いている。いや、むしろ彼女を想うその気持ちは、年を重ねるごとに、僕の心の中でより大きく強いものになっていった。

家にいる時は、いつも彼女と一緒にだった。食事する時は僕の向かい側の席に彼女を座らせ、彼女の顔を見つめながら食べた。宿題をする時も学習机の上に彼女を座らせていた。すると、いつもはただら時間ばかり掛って一向に効率の上がらなかった宿題が、てきば

き、さくさくと出来てしまうのだから不思議だった。それも、とても楽しく満ち足りた気分で……。

それを裏付けるように、ほぼ全教科の成績が上がっていった。僕が彼女を愛おしそつに扱うのを困惑の目で見ていた母も、この点については、ことのほか喜びを露わにし、

「この子が勉強出来るようになったのは、あなたのおかげよ。ありがとう」

と、彼女に感謝の言葉と満面の笑顔を贈ってくれた。僕は幸せだった。この柔らかくて温かくて優しさに満ちた時間が永遠に続いていく。僕は、そう実感していた。

「スマレちゃん。僕、最高に幸せだよ。この気持ち、わかる？」

「ええ、わかるわ。私もあなたと同じくらい幸せなもの。大切にしてくれて、ありがとう」

「ずつと一緒によいようね。これから先も、この世の終わりが来る時まで」

「嬉しい。私もずつとあなたのそばに居させてね」

「もちろん。スマレちゃんは僕の……一番大切な……恋人だもん……離したりなんかしないよ」

「ありがとう。私、あなたと出逢えてよかった。これからも、よろしく願います」

「こちらこそ、よろしくね。スマレちゃん」

彼女と一緒にいると僕は、心も体も大きくなったように感じた。自分の命に代えてもスマレちゃんを守らなければ……。そんな想いが、甘酸っぱくてとろけるような感覚と共に体の奥深くから湧き出してきた。僕に男としての勇氣と力とを与えてくれた。

でも、僕らの運命は両親の死によって、大きく変わってしまった。

初め、自分の身に降りかかった出来事に対して容易に受け入れることができなかった僕は、叔父や叔母に指示されるままに、告別式の

日程を終えた。

二人並んだ遺影に向かつて焼香をする時も、棺の蓋が閉められ二台の霊柩車が厳かに出棺したときも、目頭を押さえた叔母と共に二人の骨を拾う時も、僕は泣くことも微笑むこともできなかった。まるで、感情というものをまるごと削り取られ、その空間に淡々と流れる周りの風景と時間とを封印されたようだった。

僕がスマレちゃんと会話できなくなったのは、それからだった。哀しいというよりは、心に空洞ができたような気分で告別式からの数日を過ごした後で、僕はその事実に向面した。

「スマレちゃん、僕はこれからどうすればいいのかな？」

「・・・・・・・・」

「スマレちゃんは、ずっとそばにいてくれるよね？」

「・・・・・・・・」

「どうしたの、気分でも悪いの？それとも、僕と一緒に悲しんでくれているのかな？」

「・・・・・・・・」

「スマレちゃんの声が聞きたい。ねえ、何か言って」

「・・・・・・・・」

「スマレちゃん、スマレちゃん・・・・」

「・・・・・・・・」

彼女、「スマレちゃん」は、何も答えてはくれなかった。それから僕は毎日、来る日も来る日も彼女に話しかけた。でも、彼女の声を聞くことはなかった。いつも僕に向かって微笑んでいてくれた彼女は、可愛いけれど静かに済ました表情を持った、只の人形になってしまった。

僕は彼女をプラスチックケースに入れ、彼女の体が収まる大きさのアルミ箱を探し出して、その中に彼女を寝かせると、蓋を閉め布テープで封印した。僕にとってそれは、自分の大切だった人の亡骸を葬るための儀式だった。そして、それをクローゼットの奥に押し込み、扉を閉めた時、何日かぶりに僕の目に涙が浮かんできた。両

親の告別式でも流せなかった涙……。それは堰を切ったように僕の瞳に溢れ出し、その量は時間の経過と共に増えていった。哀しさと切なさ大きな波となって、僕をすっぼりと飲み込み、孤独の淵へと押し流していった。自分が大切に想っていた対象を失うということが、あんなにも苦しく辛いことだとは知らなかった。

岬の家を出て街へ引越してからも、その辛い気持は続いていた。ただ、彼女を家のクローゼットに封印してきたということが、不確定な未来の再会に対して、微かな期待を持たせてくれたということも事実だった。いつの日にか、再び「スマレちゃん」に逢える……。その希望だけが生きる糧だった。

夏で日の入りが遅いとはいえ、本来ならもう薄闇が空を覆う時間帯だ。でも、恒星となった超巨大隕石・M?Z1287の放つ光が、日本に白夜のような現象をもたらしていた。

僕はスマレちゃんを小さな体をそっと腕の中に抱きしめながら、次第に明るさを増して大きくなっていく宇宙からの来訪者を見つめた。「みてごらん、スマレちゃん。あの光ってるの、隕石だよ。もうすぐこの地球に衝突するんだよ」

「……………」

光の加減だろうか、彼女の目元に笑みが浮かび、唇が微かに開いたような気がした。

「でも、人生の最後をスマレちゃんと迎えられるなんて、僕は幸せだよ。あと、ほんの数時間だけど、僕はずっと一緒にいるからね」

「あ、あり、が……とう」

僕には確かに彼女の声が聞こえた。

「スマレちゃん……しゃべれるの？僕の声、聞こえてる？」

「あなたの声……ちゃんと……聞こえてるよ。帰ってきてくれて……ありがとう。私、とっても嬉しい」

20数年ぶりに耳にする、僕の全生涯で一番大切な女子の声だった。

「ずっと、一人ぼつちにしてごめんね。淋しかったよね……。辛かったよね……。暗いクローゼットの中に閉じ込められて、怖かったよね」

僕の中に彼女を置き去りにしたということへの激しい悔恨が湧きだし、いたたまれなくなつた。たとえ、当時の僕を取り巻く事情や状況がどうであれ、僕は今、僕の腕の中にいる彼女をここに置き去りにしたのだ。

「うん。いいのよ、そんなこと。私はいつの日か、あなたが必ず私を迎えに来てくれると信じてた。誰かを信じて、その人を想い続けるって、とつても素敵なことだった。あなたと出逢わなければ、私はもうとつくの昔にただの人形として処分されたと思う。あなたが私に作りものとしての人形以上の価値と幸せとを与えてくれたの。私、本当に幸せだった。ありがとう」

「スミレちゃん……」

あとはもう声にならなかつた。しばらくは、止めどなく涙があふれ続けた。彼女の小さな体は、まばゆい光に満ちた夜の中で柔らかく温かく輝いていた。僕はその小さな体を両手でそつと抱きしめた。

これが僕の幸せの形。

これが僕の愛の姿。

これが僕の命の証し。

目を閉じた僕のまぶたに巨大な光の塊がぶつかってくる。

「スミレちゃん、これからはずっと一緒だからね」

彼女がこつくりと頷き、微かに微笑むのを感じながら、僕は永遠の光の中へと旅立つた。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4386y/>

カウントダウン

2011年11月17日13時36分発行